

■ 連載 縄文以来の伊達

アンゴラ、軽さ3分の1、暖かさ3倍（羊毛比）

マテリアル・コンサルタント 川島茂信



「アンゴラ兎」

1)沿革：日本人が鰹を好んで食べてきたように、兎を好んで食べてきたフランス人

が中世から品種改良を重ね、野生種より創り上げたと言われている。

150年前に、フランスで初めてホーム・スパンされたのが紡績の始まりと言われているが、戦前はフランス、英国、ドイツ、ポーランド、チェコスロバキア（旧）、ハンガリー、日本などで飼育され、世界合計では30～60万^{*}ogramが産毛されている。当時カシミアより遙かに貴重な毛原料であった。

戦後、外貨獲得策として中国でアンゴラの飼育が始められ、今日では世界一の主要産毛国になった。産毛量は750万^{*}ogramに達し、その他チリ6万、フランス10万、チェコスロバキア2万、ハンガリーで2万^{*}ogram生産され、推定世界合計は770万^{*}ogramになっている。しかし、全羊毛生産量に比して0.2%だ。

品種は 尖端がスパイキー（毛尖が偏平な三角）豊かなガードヘアに富み、SCALEに恵まれたフランス種 やや細いが少しSCALEに豊かさがなく、ガードヘアの無いドイツ種の二種がある。

ドイツ種はバイオテクニクにより動物の体の大きさが2倍大型に品種改良された。同じ労働力で、2倍の産毛効率が得られる。中国ではほとんどドイツ種の飼育に変えられている。

平均繊度は14.5ミクロンで極めて細く、竹の節の様に髓が中空で、表面も極めてデリケートな構造のため、自然に毛と毛の間に空気

を含んで盛り上がり、軽さは羊毛の三分の一、暖かさは三倍と言われる。

真に天与の貴重な繊維で、そのデリケートな構造のためフェルトし易く、水に触れるとフェルトしてしまうので、手で夾雑物を取り除き、手で選別して繊維の長さにより「特級・1・2・3・4級、オフグレード、マット」に分けられる。

洗毛工程は無く、紡績～ニット～織り～最終製品まで全く水に触れる染色工程がなく、普通、アンゴラ製品は最終製品で染められる単色のものである。最近は技術的努力により系染めによる柄編み、柄織りが評価されている。

2)染色：アンゴラの染色は極めて難しく、また染色すると風合いが悪くなるので、自生地かきわめて薄いパステルで使うのが最善である。

その他の色付けは他の素材で考慮し、アンゴラはRAW WHITEかLIGHT PASTELで使用するのが賢い。アンゴラのRAW WHITEは最高な純白で、人為的には作り出せない程素晴らしい白である。

最近フランス種の毛足の長いスパイキーに富んだ毛がアクセントとして装飾系にカムバックしている。

イタリアではアンゴラとカシミアの見分けがつかない程上手に使う。FAWN COLOR LIGHT PASTELの薄色での繊細な起毛の工夫をし、アンゴラとBABY KID MOHAIRとブレンドして絶妙の複合効果を得ている。最近カシミアの需要が増え高騰しているので、アンゴラでカシミアの風合いを出す工夫が盛んになるだろう。（次号へ続く）